

宋代における六即解釈の一樣相

——六即の能所義について——

久保田正宏

天台の六即に関する教説の中に、蛭蛭六即説という四明知礼独自の教説があるように、宋代天台においては、六即の解釈をめぐる思想展開があつたことが知られている。知礼はこの教説を打ち立てることにより、衆生が仏に即し、迷が悟に即するという教学の大前提を改めて強調したのである。⁽¹⁾

さらに知礼没後の宋代天台には、六即という行位を、能動的に即していくという側面と、受動的に即されるという側面の両面から捉えるという特徴がある。つまり、宋代天台の諸師は、六即を能即と所即に分けて解釈しようとするのである。そこで小稿では、宋代天台の諸学匠が、どのような思想に基づいて六即を能所に分けているかという問題意識の下に、宋代における六即解釈に若干の検討を加えたい。

宋代天台における六即解釈の基調となつているのが、湛然の『止観大意』に示される「……即故初後俱是。六故初後不濫。理同故即、事異故六。凡諸經中有即名一者、如生死即涅槃之流。皆以六位一甄之。使始終理同、而初後無濫。」⁽²⁾

という六即の定義であり、宋代の諸師は、この定義を踏まえて六即の能所義を論じるようになる。

それでは、宋代の学匠が具体的にどのような六即の能所義を説いているかというところ、まず、神智従義(一〇四二—一〇九二)撰『天台四教儀集解』巻下には次のようにある。

……事異故六者、理即・名字・觀行・相似・分証・究竟六位不同、迷悟異也。理同故即者、三諦之理。六位咸然。故云理即・名字即乃至究竟即一也。既云生死即涅槃、又云煩惱即菩提・結業即解脱。斯乃三障為能即三德為所即。三德又是三諦異名。人不見之、却云三千即假為事異故六三千空中為理同故即。又以妙假一為能即、空中為所即。是則能即既謬、所即殘闕矣。智為能即一義亦不然。⁽³⁾

この記述によると、従義は、生死・煩惱・結業の三障を能即とし、涅槃・菩提・解脱の三徳を所即としている。これは、迷と悟の観点から考えるならば、従義が能即を迷と捉え、所即を悟と捉えていると言ふこともできよう。

さらに、右に示した『天台四教儀集解』巻下には、批判の対象となる二つの説が示されている。第一説は、仮諦を能即とし、空諦と中諦を所即とするものであつて、これに対して従義は、「是則能即既謬、所即殘闕矣。」と批判するのである。そして第二説に対する批判は、「智為能即一義亦不然。」という末尾の文に見られる。なお、従義が批判するこれら二つの説は、後述する南宋時代の文献に示される諸説と大きく関わってくるのである。

次には、南宋時代の北峰宗印（一一四八—一二二三）が示す六即の能所義を見ることにする。宗印は『北峰教義』において、知礼の『十不二門指要鈔』や『観無量寿仏経疏妙宗鈔』を引いた上で、六即の能所について見解を示している。

二六即能所者、四明指要則曰、凡言諸法即理一者全用即体方可言即。又妙宗云、六種即名皆是事理体不二義。而迷逆事与其覺理一未始暫乖。故名即一。又障即一。其名猶通。以三後五人皆云三障即是仏一故。四明之義以三事用諸法一為能即一、理体諸法為所即。德障言レ之、三障為能即一、三徳為所即。並合三祖師諸文。今不備引一略明二義。一、通論。事造三障諸法為能即。以三皆理具無不即故。二、別論。事中一念自心為能即。以下從三近要一易レ成レ觀故。此皆四明宗旨云云。諸文处处有三此兩義一更不引証。而草庵諸師局一唯一念一違一大義一也。⁽⁴⁾

宗印によれば、知礼の意は、事用の諸法を能即とし、理体

宋代における六即解釈の二様相（久保田）

の諸法を所即とするものであるという。また、三徳と三障について言うのであれば、三障を能即とし、三徳を所即とするのが知礼の考えであるというのである。さらに、宗印は上記のような六即の能所を、通論と別論の二つに分けて整理する。まず、通論によれば、事造の三障の諸法が能即になるといふ。次に別論では、事中の一念自心が能即になるとしている。

こうした宗印の説は、知礼述『観無量寿仏経疏妙宗鈔』巻一の「六種即名皆是事理体不二義。……而迷逆事与其覺理一未始暫乖。故名即一。……又障即一。其名猶通。以三後五人皆了三障即是仏一故。」⁽⁵⁾といった記述を拠り所としているが、三障を能即として三徳を所即とするという宗印の能所義は、明らかに従義の説と一致するとも言える。ところで、宗印撰『北峰教義』は、現存しない浄覚仁岳（九九二—一〇六四）撰『義学雑編』に対する反論でもある。六即の能所義についても、宗印は仁岳の説を次のように批判している。

二、淨覚異見。雑編有三三節。初分一対名義。謂、空中之理同故即也。即仮之事異故六也。仮事為能即一、空中之理為所即。評曰、止觀大意云三理同故即如三生死即涅槃之流。必該三煩惱即菩提・結業即解脫。乃三道即三徳。何嘗專以空中之理同是所即、俗諦之事異是能即一耶。……⁽⁶⁾

右の記述では、まず、仁岳の『義学雑編』が引かれ、「評曰」以降に宗印の批判が述べられている。ここに示される仁岳の

説というものは、三諦を分割して仮諦を能即とし、空諦と中諦を所即とするものであつて、こうした仁岳の説を宗印は批判するのである。

このような仁岳の説は、宗印の門弟である仏光法照（一一八五—一二七三）が著した『法華三大部読教記』卷一六においても、「……今謂、理同者三千空中之理、迷悟咸同也。事異者三千即仮之事、因果有異也。理雖具假、由未緣起故對事辺。同名空中亦可得云對事方合扱理常開。是則事為能即一理為所即。所即如空無高下。能即如飛者淺深。」と伝えられている。ここで注目すべきは、宗印や法照が伝える仁岳の六即の能所義は、従義撰『天台四教儀集解』卷下で批判されていた二説の中の第一説と一致するということである。すなわち、従義が仁岳の能所義を批判していた可能性が指摘できるのである。

さて、南宋時代において、宗印や法照とほぼ時代を同じくする学匠に柏庭善月（一一四九—一二四二）がいる。善月述『山家緒余集』巻中の「……但理不自理、要必有事。事理具足方曰円詮。故約理性雖無迷悟、而事有迷悟。悟分真似・因果等別。故六位於是甄分。雖分六位之殊、而其所即之理恒一。……」⁽⁸⁾という記述からは、善月が六即の所即を、六位の高下と対照的なものとして捉えているということがわかる。そして、善月は同書同巻において、六即を能所に分け

るときの能即と所即について、次のように自説を述べる。

或曰、即分能所。此論能所一乎。曰義門分別。斯亦可矣。然約六即而論能所者、有通有別。通以六位之事為能即、迷悟、不二之理為所即。別則前四妄心為能即、後二真智為能即。亦可下約分極論之。亦可初後不分能所。迷悟之際極故也。中間四即約修以說乃得論之。若円論即體、體不二故方名為即。是則六即皆不可分也。或者定謂円詮教旨不分能所。此得其體而失於義也。若謂必分而不知有不分之理者、此又失也。孰知不分而分、分而不分者乎。⁽⁹⁾

善月は、六即の能所について論じる際に、通論と別論を立てている。まず通論では、六位の事が能即とされ、不二の理が所即とされている。能即に対して「迷悟行証」という割註があるように、善月は、迷と解をとともに能即に収めているのである。そして別論においては、六即の前四即では妄心が能即であり、分証即と究竟即では真智が能即であると説く。このような善月の通別論は、「亦可初後不分能所」という記述からわかるように、六即という行位の高下をもつて能所を分けてはならないという立場をとるものである。したがって善月は、迷・悟あるいは迷・解を、ともに能即に収めるのであり、能即を迷と捉えて所即を悟と捉える従義や宗印とは異なる能所義を示しているのである。

また、前に見た従義撰『天台四教儀集解』巻下において、

従義が批判していた二説の中の第二説は、まさに善月の別論で言われる真智の能即と重なるのである。このことは、すでに従義の時代に、善月の説と同様の能所義が説かれていたことを窺わせるものであると言える。

以上のことから、宋代天台においては、六即の能所義に関して多様な意見が出されていたことが知られるであろう。仁岳は、三諦を分割して仮諦を能即到、空諦と中諦を所即到にするのであるが、これに対して従義は、仁岳とは異なり、能即を三障、つまり迷と解釈し、所即を三徳、つまり悟と解釈する。そして、後代の宗印と善月も、六即を能所に分けて解釈するという方法を用いることになり、その際に宗印と善月は、通論と別論を設けるが、両者の通別論の内容は同じものではない。⁽¹⁰⁾ 従義や宗印の説と異なる善月の説は、六即という行位の高下をもって能即と所即を分別するべきではないという考えの上に成り立っていると見えよう。

このように、従義をはじめとする諸師の能所義は、迷と悟の観点から見ても同様ではなく、結果として、その相違は宗印と善月の両説に明確に表れているのである。

- 1 知礼の蜻蛉六即説については、安藤俊雄『天台学論集——止観と浄土——』（平楽寺書店、一九七五年）所収の同「観無量寿経疏妙宗鈔概論」（同書五六―六〇頁）等、参照。
- 2 大正四六・

宋代における六即解釈の一樣相（久保田）

四五九頁下。 3 続蔵二一七・六三丁右下―左上。

4 続蔵二一六・二三五丁左下。因みに、ここに示される宗印の六即の能所義は、牟宗三『仏性と般若』下（台湾学生書局、一九七七年・一一五頁）で註釈されている。

5 大正三七・二〇〇頁上中。 6 続蔵二一六・二三六丁左上。この記述における宗印

の仁岳説批判については、安藤俊雄『天台思想史』（法蔵館、一九五九年・二〇三頁）に概説がある。

7 続蔵一四三・四〇九丁右上。 8 続蔵二一六・二六〇丁右上。

9 続蔵二一六・二六〇丁左下。 10 例えば、大宝守脱撰『観経疏妙宗鈔講述』卷一（天全二・四六頁下）では、宗印と善月の能所義が、ともに『観無量寿仏経疏妙宗鈔』卷一（前出、註5）の教説に合致するものとして引かれている。

の教説に合致するものとして引かれている。

〈参考文献〉

安藤俊雄『天台思想史』（法蔵館、一九五九）

安藤俊雄「観無量寿経疏妙宗鈔概論」（『天台学論集——止観と浄土——』平楽寺書店、一九七五、一一―一二頁）

牟宗三『仏性と般若』下（台湾学生書局、一九七七）

〈キーワード〉 六即、能即、所即、北峰宗印、柏庭善月

（早稲田大学大学院）